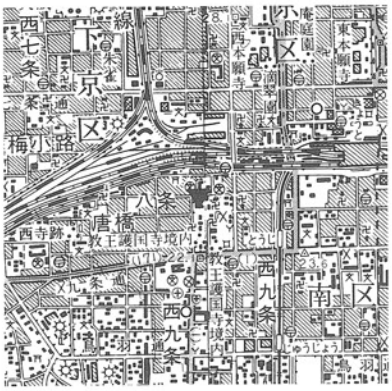
京都・東寺（教王護国寺）旧境内

1 所在地　京都市南区壬生通八条下る東寺町
2 調査期間　二〇〇一年（平13）六月～二〇〇二年三月
3 発掘機関　㈶京都市埋蔵文化財研究所
4 調査担当者　吉崎　伸・高橋　潔・近藤知子
5 遺跡の種類　寺院跡
6 遺跡の年代　平安時代～江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は東寺（教王護国寺）の北側隣接地で、平安京の条坊でいうと左京九条一坊十町にあたり、東寺の旧境内地でもある。調査は校舎の建て替えに伴うもので、約三八〇〇㎡について実施した。検出した遺構は、平安時代中期から後期、室町時代、江戸時代の大きく三時期に分かれる。



（京都西南部・京都東南部）

平安時代中期から後期の遺構としては、井戸・土坑などを検出したが、数は少ない。平安時代中期の瓦が大量に出土し、この中には焼け歪んだものや生焼けの瓦が多く含まれることから、近隣における瓦窯の存在がうかがえる。室町時代の遺構としては、東西・南北に掘られた溝（堀）を多数検出した。これらの溝によって区画された中に建物・井戸・室・土坑などを多数確認している。建物の中には仏間を備えた客殿風に復元できるものがあり、これらの遺構群は東寺の子院の可能性を指摘できる。江戸時代の遺構としては、建物・井戸・土坑・池状遺構など多数を検出したが、これらは調査区のほぼ中央を南北方向に延びる低い石垣と、それに直交して西側へ延びる溝と柵列によって三つに区分される。この状況は東寺に残された江戸時代中期の絵図（「東寺院家図」）とよく一致し、石垣の東側が「金勝院」、北西が「増長院」、南西が「宝泉院」という子院に相当するとみられる。

木簡は「宝泉院」とみられる敷地の池状遺構から一点出土した。この池状遺構は一辺一五・〇ｍのほぼ正方形を呈し、その形状から園池であると考えられる。これは一七世紀末から一八世紀初頭に埋め戻されており、その埋土に大量の遺物が含まれていた。木簡以外の遺物としては、土師器、瓦器、施釉陶器（京都、肥前、瀬戸・美濃産）、焼締陶器（常滑、信楽、丹波、備前産）、磁器（肥前、中国産）などの土器類のほか、瓦類（軒丸瓦、軒平瓦）、石製品（砥石、硯）、金属製品（火箸）など多彩なものがある。

また、木簡以外の文字資料としては、鎌倉時代の丸瓦に和歌が線

刻されたものが一点ある。これは江戸時代の井戸に混入していたもので、焼成前の丸瓦凸面に文字をヘラ書きしたものである。文字は焼成時に生じたひび割れが重なって判読が難しいが、四行にわたって記されている。釈文は次の通りである。

「何事も華とちり行
　　世の中に
　　我よ人よとゆふぞ（かなきカ）
　　は×

そのほか内面に「炙」と墨書のある土師器皿（江戸時代）、「東寺」の刻印のある瓦（鎌倉から室町時代）、「左寺」「日」「工」「中」の刻印のある瓦（平安時代）なども出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「善□□（兵衛カ）」　65×19×3　011

柾目の板材を用いたもので下端の一部を欠損するものの、ほぼ原形をとどめている。表面に人名と思われる墨書がある。

なお、木簡と文字瓦の解釈にあたっては東寺のご協力を得た。

9　関係文献

㈶京都市埋蔵文化財研究所編『東寺（教王護国寺）旧境内』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報二〇〇一―七、二〇〇二年）

（吉崎　伸）

ヘラ書き瓦